特別支援教育の扉 №９４　　令和６年４月４日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「子どもに伝えたいこと」

その１　「一人一人に合ったえこひいき」

「学級には、りんごが好きな子、みかんが好きな子、いろいろいるよね。もし、先生が全員にりんごをあげたら、りんごが好きな子はうれしいけど、みかんが好きな子はうれしくないよね。だから、先生はその子が一番うれしいことをする。それは、あなたを先生が大切に思っている印なんだ。先生が他の子にあなたと違うことをしていても、どうして私にはしてくれないのと思わなくてもいい」

必要なのは、どの子にもその子に合った特別扱い（えこひいき）をしていることを子どもたちに実感してもらう学級の風土づくりである。そうすれば、個別の配慮が必要な子どもに特別な対応をしているときも、その子に必要な対応としてみんなが認めていける学級となる。

その２　「支援が違っていて、当たり前」

「一人一人の顔が違うように、得意なこと、苦手なこと、好きなこと、困っていることもみんな違うよね。だから、困りごとが違えば、応援の仕方も違って当然。例えば、視力の弱い人は、めがねをかけるよね。それをずるい！、ダメ！と言う人はいないよね。それと同じように、学級には読んだり書いたりすることがちょっぴり苦手な人がいる。先生はその子の困りごとに合った応援をする。だから、困ったとき、誰でも助けと言える学級にしよう」

その子にとって特別な支援が学級の当たり前の支援として自然に許容される文化が醸成されるよう、「先生はいつでも誰でも助ける、みんなもお互いを助け合おう！」というメッセージを送り続ける。「困っていんだ」という雰囲気が学級に浸透すると、特別な支援は当たり前の支援になる。特別なことは、長続きしない。

その３　「〇年〇組の鍋を作ろう！」

「白菜だけ入っている鍋料理（A）と、いろいろな種類の野菜や肉が入った鍋料理（B）では、どちらがおいしいかな？　Bの鍋料理だよね。学級も同じで、〇年〇組という鍋の中に同じ人がたくさんいてもおもしろくない。いろいろな人がいて、みんなちがって、みんないいんだ。では、鍋料理とは別に、豆腐だけそのまま何も付けずに食べてと言われると、うれしい？　あまりうれしくないよね。豆腐も鍋の中に入れたいよね。学級も同じで、〇年〇組という鍋の中にみんなが気持ちよく入っていることが大切なんだ」

料理を作ることは、それを食べる相手の笑顔を見たいと思う「優しさ」である。料理を作ることは、優しさを覚えることでもある。また、料理を作るには、時間がかかる。時間がかかることは、それだけ学級のみんなを思いやる時間が増えることであり、優しさがグツグツと煮込まれることになる。みんなで優しさが詰まったおいしい鍋料理を作ろう。

違いは時として、いじめや差別を生む。学校は小さな社会であり、学校での共生社会の形成なくして社会全体の共生社会はあり得ない。一人一人の違いは欠点ではなくその人らしさであり、意味がある。違いや多様性を認め合う学級づくりを目指そう。

とれたて直送便

「みかんの話」

みかんには、「早生（わせ）・旬・晩生（おくて）」がある。どのみかんがよいとか、悪いとかではない。早生は早生、旬は旬、晩生は晩生のよさがある。人間にも「早生・旬・晩生」がある。それぞれ優劣に関係はない。一人一人違うことは、当然なことである。そして、一人一人違っているからこそ、生まれてきた価値がある。あるがままの子どもを受け止めて、その子どものよさや魅力を最大限伸ばしてほしい。